



1月のテーブル「新年の祈り」
池上洋子作

うた ひつじの詩だより

2013. 1. 1
毎月発行 No.142
この便りをご注文の品と
いっしょにお届けします

小沢健二さんをご存知でしょうか。1990年代に一世を風靡したシンガーソングライターで、現在は、ミュージシャンとしては一線を退き、ニューヨークを拠点に文筆活動などをしていらっしゃるようです。たまにたま目にした彼のブログで、そこにあった文章を読んだ時、まるで私自身や、スウェーデンひつじの詩舎を通じて出会ったたくさんの方の手仕事仲間たちに向けて、応援の言葉をもらったような気持ちになりました。

2年前、彼の叔父に当たる指揮者小澤征爾さんが、手術後の復帰公演をニューヨークのカーネギーホールでなさった時に書かれたものです。もとより、私は小澤征爾さんの大ファンですので、よけい心に響きました。もうとくにお読みになった方も、もしかしたらいらっしゃるかもしれませんが、たくさんの方にご紹介したく、抜粋を引用いたします。全文は、小沢健二さんの公式サイト「ひふみよ」
<<http://hifumiyo.net/>> でお読みいただけます。ぜひ、ご覧ください。

佐藤治子

「手」

小沢健二

(前略) 先日ニューヨークで行われた、サイトウ・キネン・オーケストラの公演の初日にうかがった時のことを書いてみようと思います。

すばらしい「手」たち。白人とも黒人とも違う、華奢で繊細なアジア人の手が、乾いたニューヨークの空気を震わす。弦楽器で、管楽器で、打楽器で。もちろんアジア人以外の奏者もいるのですが、やはり手の大多数は、あの俊敏な、注意深い、一時も緊張感を切らさないような、アジア人の手。

(中略)

えー、三曲目は、騒がれまくった「小澤征爾の復活」というやつで、唯一無二の偉大な指揮者の歴史的パフォーマンスが今！なのですが、僕としては、体重と体力を落とした叔父さんが、振り出したら途中で止めるわけには行かない舞台に立つ、ということだけでもう息がぜえぜえ苦しくなるわけで、(中略)

だって病気の前では、誰だって一人のはかない人間ですよ。病気は「あ、マエストロ征爾か、許してやろう」なんて思わないですか。

しかしー

緊張しまくった舞台上と客席を貫く雷鳴のように、「手」たちはやってのけたのだ！アジアからわたってきた俊敏な鳥たちが、一世代の踊りを踊るように。

舞台上も客席も、毛皮を纏ったニューヨークの超金持ちたちも(中略) 一体となる中、中心では拳の形に握られた指揮者の黄金の手が、念力を送る！そこだっ！(ベース) それっ！(ヴィオラ) そこっ！(オーボエ) うりゃっ！(ティンパニー)

何か、念カショーのようでもあり、ハリー・ポッターの戦いのようでもありました。

終わってロックコンサートのように嬌声を挙げて騒いでいたアホどもがボックス席あたりにいたと思いますが、あれは僕らです。これが叫ばずにいられるか！てなもんです。

いや、まじめに言って、すばらしかった。あの拳に握られた黄金の手を、僕は一生忘れません。

それで思うのですが。

世の中には色々な変化があって、僕らは色々な幻想を持ってテクノロジーに接したり、テクノロジーの方から僕らに接してきます。そのテクノロジーは、純粋な素晴らしさを持っている時もあれば、怪しげな宣伝の思惑を持っている時もあり、色々な事情を含んだものです。けれど基本的に、何かを簡単に、ある種のボタン操作にして、あまり手を動かさずに済むように、みたいなことが、世の中にひたひたと迫ってきて。

それが悪いとか言っているのではなく、それは一つ一つ、具体的な思惑や背景を持っていて、よく見ないと、本当の意味はわからない。裏切られたり、意外に良かったりする。

でも、手は裏切らないし、「意外に」というのは手にはない。手は、それまでの時間に積み重ねられてきたことを、絶対に裏切らずにやる。

手は、信頼できる。友情のように。愛のように。手のように信頼できるものって、少なくなっている。だから思うのです。というか、願う。

手を使っている人、がんばれ。楽器を練習している人、絵を描いている人、字を書いている人、庭いじりをしている人、裁縫ごとをしている人、球技をやっている人、格闘技をやっている人。足でもいい。走るのが好きな人。歩くのが好きな人。スケートボードを練習している人、サッカーをやっている女の子。自転車で夢中な中年男性。

機械を使っている人、手仕事っぽい使い方をしてしまう人。箸を使うのが好きな人。料理するのが好きな人。合唱したい人。プラバンやりたい人。踊りたい人。EQいじりたい人。手品師。散髪師。すり。医者。寿司屋。部品屋。エンジニア。

僕らの手はあまりにすごすぎて、ボタンを押すだけになってしまうのはつまらない。

堂々と、手を信頼して、行きたいです。

(2010年12月20日)

ぱたぼん通信 世界に学ぶ イギリスでフェルト作り

9月のイギリス南西のデボン州・トットネスはちょうどアート・ウオークフェスティバルの真っ最中でした。絵画、彫刻、陶芸、手工芸などいたるところにオープンハウスがあり、街のカルチャーセンターではタンゴ(舞踊)やヨガ、料理など気軽に受講できます。

トットネス在住の彩子さんのゲストハウスはメイン通りの一角の2階にありました。他の方とのシェアが条件で、格安で約2週間借りることができました。

最初の目的だった「アガサクリスティーを訪ねて」などはとうに忘れてしまい、オープンハウスを見て歩く日々が続きました。そしてついにフェルトの先生に出会ったのです。シュタイナー・スクールで子どもたちに教えているという先生はユニークで楽しい方でした。まず1日目、イメージしているものをスケッチしてくるよう宿題を出されました。緑豊かな自然とオルタナティブな精神が調和したこの街をダート川を中心にフェルトで表現することにしました。2日目、先生はざっとやり方を教えたかと思うと、裏の木戸からかご下げて買い物に出かけてしまったのです。残された私はひとりで黙々と作業をする他ありませんでした。途中で知らないおじさん(ご主人とまちがえた!)が入って来られたりとハブニングはありましたが、それも今となっては忘れられないよき思い出です。

日本に帰り、1ヶ月も経ったころ、教室案内のポスターが届きました。そこには何と、私の作った犬のマックスさんとトットネスの風景がありました。

今でも甘い香りのスコーンと神秘的なダート川、毎日通ったキャロル先生の陽気な笑い声が心に横もっています。

足立美和子(兵庫県明石市在住)



2013年も、スウェーデンひつじの詩舎は、こつこつとたゆまず手仕事を伝え続けます！子どもたちの幸せを願いながら。

営業は1月5日(土)からです。今年どうぞよろしく願いいたします。

「スペース ペレのあたらしいふく」1月の開店日
5日(土)~15日(火)(日曜・祝日除く)10:00~16:30

ホームページ <http://www.s-hitsuji.co.jp/>

編集担当：佐藤治子

♥スウェーデンひつじの詩舎♥
スペース ペレのあたらしいふく

〒244-0001 横浜市戸塚区鳥が丘 15-2

TEL&FAX 045-881-6900,6665

佐々木のアトリエ TEL&FAX 045-811-6708

相談窓口(金) 寺田裕子 045-881-7035